山と博物館

第42巻 第9号 1997年9月25日 大町山岳博物館

秋のひろいもの　絵 勝山 千帆

「散歩をしよう、森へ行こう」

勝山 千帆

インディアンにとって、歩くことは瞑想と同じだと言う。私は、海辺や、森や、山、街の中も含めてよく歩く。これは 私が、車を運転しないせいもあるのだけれど、歩くのが好きだから、「趣味は?」と聞かれると、「散歩。」と、答えているくらいだ。

だれかと一緒に歩くのも 楽しいけれど、やはり 森や海は ひとりがいいと思う。悩みや、悲しみが心の中にあっても、森を歩き風を感じ、葉のざわめきに耳を傾け、木々の間からさし込む光を見ていると、心の奥から幸せや喜び、勇気、そして感動に似た感覚が湧き上がってきて、とても安心する。だから、インディアンであろうと、日本人であろうとひとりで自然の中に身を置き、歩き、感じるということには、普段、眠っている部分を目覚めさせてくれるような、とても大切な何かがあるように思う。

秋の散歩は 特にわくわくして、森や山歩きが 瞑想から一転、宝探しに変わる。強風の吹いた次の日などは、ポケットに袋を入れて、前日、パラパラと音を立てて、降っていたのであろう落ちたての黒く輝くしいの実を、(もちろん食べる為に) ひろいに行く。途中、しゃがむと、ふと枯れ葉の影に 小さなきのこが、まるで虫用のカサのように生えていたり、世界中のどんな宝石にも負けないくらい美しい、紫や青の実をつけた野ぶどうを発見すると、もう動けない。そう、秋の森では、ちっとも前に進めないのが、唯一の問題かも知れない。まるで、森の妖精たちが、次から次へと宝物を出してきて もう二度と森から私を出してくれないのではないかと思うほどだ。

いつかは そんな妖精の誘惑に負けてしまいそうで、ちょっと怖い気もするけれど、次はどんな宝物を見せてくれるのだろう?と、ドキドキしながら 結局私は きょうも散歩に出かけてゆく。

(画家)

当世キノコ事情
―「私のキノコ談義」その後―

清沢由之

一、前口上

秋がめぐってきて落ち着けない方も多いのでは?夏の少雨。「今年はダメジャネエカイ?」という悲観論の私のキノコ仲間。私自身は、秋口にしっかり降ってくれさえすればと希望的観測ですが皆さんの予測は?

さて、私がこの「山と博物館」にキノコにかかわる雑文を書かせていただくのは六回目かと思います。二回目あたりから、「雨とキノコの発生」(天候、気温等を含めて)といったテーマで少し統計的にも継続研究すれば雑文から一歩抜け出せるかも―と思いつつ光陰矢の如し、十数年が経過。という訳で、今回もあくまで、野の、巷の一キノコ好き野郎の雑駁談義、当世書生気質ならぬ、最近私の耳にしているキノコ情報を皆さんと共に相考えてみたく、無学浅学を顧みず、お引き受け候であります。

二、うれしきこと?―されど

①キノコの本の発刊の増加

私がキノコに関心を持ち出して、長くお世話になったのは山形県の清水大典先生の「きのこ全科」。旧版の今関六也先生の「日本菌類図鑑」正続。川村清一先生の八分冊の「原色日本菌類図鑑」や古本のたぐい。今では様変わり、書店の趣味コーナーの一角。沢山のキノコの本が美しいカラー写真入りで、中にはファッション性のあるものまで。出版社も図鑑の老舗から婦人雑誌社まで。更にはマニュアルの時代。キノコの味区分から料理法まで至れり尽せり。地方の新聞社の本も―この方は旅の楽しみでもありますが。北海道、群馬、新潟・・・。

おかげで、分からなかったもののがはっきりしうれしいことです。

例えば「ドクヤマドリタケ」―これは私たちが昭和五十七年九月、信濃毎日新聞社より「信州きのこ百科」を出した際、それまで日本にはイグチの仲間(管孔)には毒タケは無いと信じられてきたが猛毒菌もある事例が出て仮称「タヘイイグチ」としていたもの。

その他、ニガクリタケモドキークリタケでもないし、ニガリクリタケとも形態が異なるし、と思っていたもの。

名前がつけられたカバノアナタケ(チャーガ)

カバノアナタケ―和名がつく前に、これはソ連のソルジェニツィンの「ガン病棟」に出てくるキノコだといわれていたものです。

それによくわからなかったテングタケの仲間の分類などです。

或いは、大作「忍者武芸帳」や「カムイ伝」で有名な白土三平氏が、海岸の松林にしか発生しないといわれていたシモコシを長野県内でも発見された話など。

②キノコ展のの増加

私がキノコに興味を持ち出し、勉強に行ったのは須坂市立博物館、昭和四十六・七年頃と思います。当時勤務中の大町第一中学校の教室や図書館で小さなキノコ展を開いて皆さんから教わりました。その後県の山岳総合センターで三年間、以後大町山岳博物館でずっと今日迄続けられています。一方、県のキノコ指導員委嘱が始まり、各地、時には村でもキノコ展が開かれるようになりました。又、松本市の塚原高校も秋の学校祭に開いてくださっています。キノコ展の草分けの一つと思います。

現物展示。日頃不明であったものが判明した時は一つの感動です。日持ちせぬキノコが多いのに交換しながらの展示。経験者の一人として有り難いことです。しかし、このキノコの本の出版ブームやキノコ展の増加について手厳しい批判を加える、或いはブームを心配する自然保護派の友人が県の内外にいることも事実で、私は時々いじめに遭っています。

「キノコは、発生のメカニズム、地球上での役割を広く深く知ってこそ意味がある。今の出版界は、ブームに乗って出せば売れるの商業ベースでしかない。長野県で盛んだというキノコ展、ただ食べられる食べられないの分類でしかない。そもそもキノコを食べる食べないはあくまで個人の嗜好の問題。少しくらい中毒が出たって交通事故に比べたらとるに足らない。野生のキノコなんか食べない人の方がむしろ多いはずなのに県の税金を使って大々的にやるなんておかしい。私が長野県民なら県庁にクレームをつけますよ。地方の町や村、公民館なら話も分かりますが。山草愛好家が増えて野生ランが激減しているように、物好きが増えて、信州のキノコは減りますよ。」―言われてみれば、ホンシメジやコウタケ、ホウキタケなんか採れなくなったなあ、と私の頭の中で受け止める声も。

「だいたいキノコは昔は主に年寄りが採っていた。それに今のように車がなかったから行動範囲だって限られていた。だから自然界の胞子の分散と発生は均衡がとれていた。それにキノコを入れるものは主に竹籠類やビクだった。先生はリュックじゃありませんか。途中で胞子が落ちませんよ。信州のキノコも減ってるって山小屋で聞きましたよ。」

そこで私は、チダケサシって植物は昔子供がチチタケを採ってその茎に刺して持ち帰ったことから和名がついたと本にあると反論してみるのだが、どうも説得力に欠けます。

「山菜やキノコは山一つ。川一つ越えれば食べる食べないが違うって言うんじゃないで

すか。山奥の温泉宿かなんかで、みたこともないキノコが出てこれは珍しいって言って食べる。－そういうところにこそキノコを味わう意味があるんじゃないですか。」

胞子とビクのことは以前から聞いている。私は石付きや食不能に傷んだものは山へできるだけ返していたが、私は知ったかぶりをして自然破壊の一端を担っていたのかもと悩んでいる今日この頃なのも事実です。

三、困ったこと－汚れ

タラの芽の木が切られたり、ヤマブドウのつるが高枝切りで切られたりは、既存の事実。キノコ山はどうでしょう。タバコの吸い殻、空き缶、ビン、ペットボトルの類の散乱。誰に片づけろ、というのか。恵をいただきながら何という不遜、恩知らず。良いことをしたら良い報いがと、私は時々大きいビニール袋に回収してくるが、神はマツタケもシメジも恵んでくれません。

マツタケの代のひっかき回し、時には天地返し。マツタケほど神経質屋さんは居ないのに。

知らないキノコを採って途中で捨ててくるのはやめましょう。誰かに鑑定してもらって捨てたのか？（中にはおいしいのも捨ててあって私はガメつくいただいてきますが。）

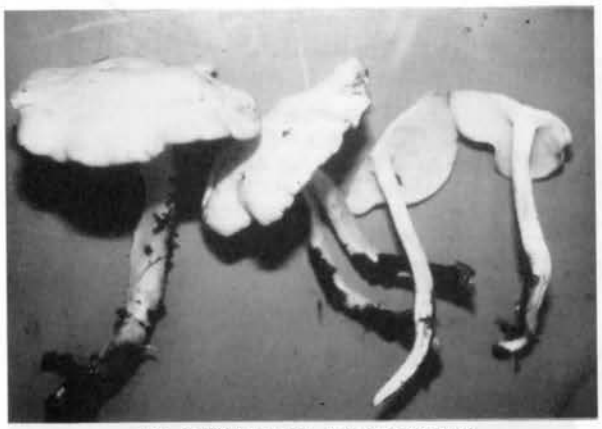
四、増えた？毒キノコ

次に最近研究が進んだり、中毒例が報告されたり、外国の図鑑との照合で分かったためでしょうか、今迄食用とされてきた幾つかが毒タケの仲間入りをしてしまったことです。

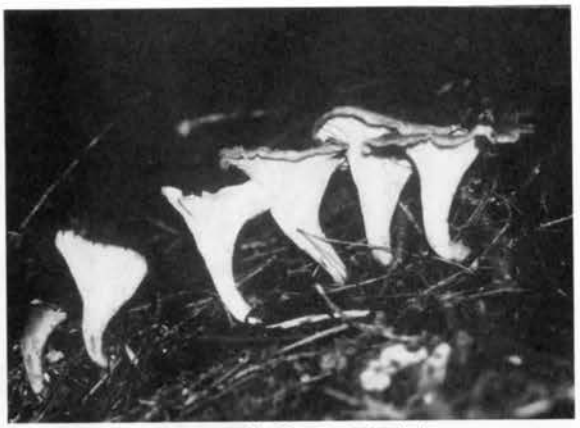
・主なものを挙げてみましょう。

ウスタケ、フジウスタケ、マツオウジ、アカヤマタケ、オシロイシメジ、ハエトリシメジ、ザラエノハラタケ、ツチスギタケ、スギタケ、キノボリイグチ等々。・要注意種としてコウタケ、マスタケ、ムラサキシメジ、ナラタケ、ナラタケモドキ、シロオオハラタケ、コガネタケ、シロハツの仲間。

以前からガンタケの危険はいわれていたし、ホテイシメジやヒトヨタケの酒と一緒は注意されてきた。私個人としては、食べ過ぎや食用でもそのキノコそのものが痛んでいたのでは、という気持ちもあるが注意しましょう。

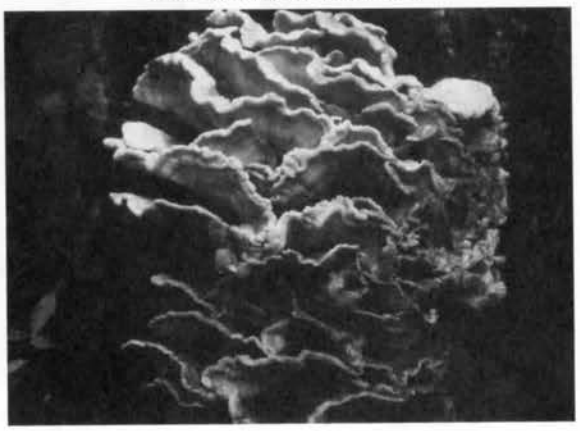


毒キノコの仲間入りしたオシロイシメジ



毒キノコの仲間入りしたウスタケ

要注意種となったナラタケモドキ
（ナラタケと違って傘の下につばがないが大町地方ではナラタケと共にモトアシの方言で親しまれてきたキノコ）



要注意種となったマスタケ

五、マナーを大切に

キノコの胞子は何万という数。私たちが山からいただく以前に既に飛散している数の方が多いでしょうが、私たちが採る分や小さい傘の開かないものは、人が胞子の散るのを阻んでしまうことは確かです。私が置いてきたって誰かが採るに決まっている。こう考えがちですが、同じキノコなら必ず数本は残しましょう。できれば山で石付きの部分は土と一緒に山へ置いてきましょう。そこに付着していた胞子は山に残るはずです。あまり小さいものは誰かに採られるかもしれないが残しましょう。キノコは環境が大切。できる限り現場保持で。（増殖の場合の手入れは勿論、別）

できたら胞子の抜け落ちる入れ物も考えましょう。そう考える心が大切と思います。

六、限りないキノコの未来

―更に研究を―

1、分解者としての働き

最近の生物学では、今関先生が提唱されたように、地球上の生物の働きを、生産者、消費者、分解者と分けるのが普通になったことはご承知のことと思います。皆さまのお家のトイレは水洗でしょうか？水洗は必ずしもベストではないという説があります。菌ないしは微生物に分解してもらって土に還元する方法が考えられ、実用化も進んでいるようです。これがうまくいけば、水洗のできないところや山小屋のし尿処理に一つの道が開けるでしょう。

2、菌根菌の研究・応用

マツタケ山の持ち主が、或る干魃の年、何本か立ち枯れしている松山を見ながら、フッと気がついた。「アレッ！マツタケの出るあたりの松は一本も枯れていねえ！」彼は山へとんでいってその事実を確認した。アフリカ等で植林が行われているが、一朝一夕にうまくはいっていないとのこと。その中で菌根菌をつける木は、がんばって生育している―そういう話を聞いたことがあります。もしこのやり方がうまくいけば、灌水が土中の塩分を引き出してかえって不毛の地にするのでなく、アジア、アフリカ、アメリカの砂漠も緑にでき、熱帯雨林を切らなくれもよくなるかも。

3、キノコは減っていないか

―酸性雨や大気汚染との関係

私は、長野県で言うリコボウ（ハナイグチ、ヌメリイグチ、チチアワタケ）の仲間が大好きです。しかし、どうも最近収穫が少なくなったように思いますがどうでしょう。そういう研究はどこかで誰か手をつけておいでしょうか。

4、食用、薬用キノコの栽培

人口爆発の時代。飽食で肥満の時代。人類はもっと菌食に頼らなければの時代が必ず来るでしょう。数年前に日本の栽培キノコ四十八種といわれました。フランスからの菌エリンギ（商品名「常念坊」）、ヤナギマツタケが店頭に並びうれしいことです。又、ヤマブシタケも成功し、中国へ漢方薬として輸出されているということ。サルノコシカケと制ガン作用については未だ未開の分野が多いと思いますが、青カビからペニシリンが作られた事実や最近注目されている腸内菌といった微生物を含めて人の健康を守ってくれる物質がまだまだ自然界に隠されていることは事実でしょう。

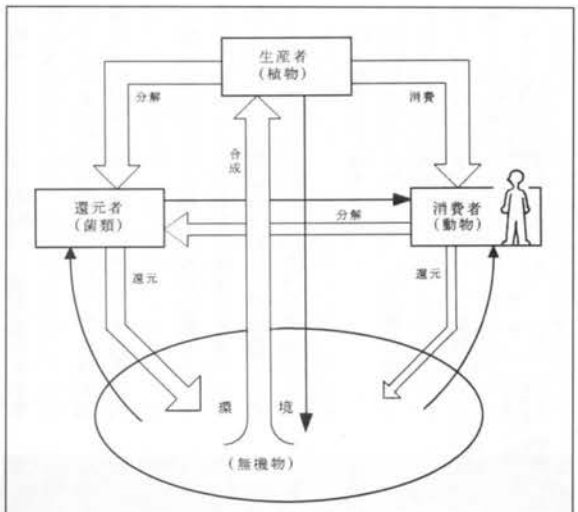
七、自然と人のあり方を

―守り育てる

国際自然保護連合のA・アレン氏は、自然は①食料貯蔵庫、②薬箱、③原材料庫、④研究室、⑤あそび場、⑥寺院であると唱えられ、それに日本自然保護協会の野鳥研究家でもある柴田敏隆氏は、⑦学校、⑧遺伝子のプールを付け加えたいと言われています。

私たちは自然が好きだ、自然を愛するといいながら、どちらかというと自然から奪う一方。自然を大事に育て守るという心が欠けていたのではないでしょうか。キノコが生えて私たちを迎えてくれるはずの里山、或る所にはスキー場、ゴルフ場に、そして、キノコも生えなくなった捨てられた里山の現実があります。人間も含めてキノコも自然の一員であることを認識し、みんなで人とキノコとのあり方も探っていきたいものです。

（山岳博物館嘱託員）



生態系と物質の循環
今関六也先生が考えられた図
動物の中の人、首から下は生態系の一員であることを示し、枠から出ている頭は人間だけが生態系のしくみを客館的に見ることができることを示す示唆的である。

大気汚染で減っているキノコはないか？
おいしいリコボー（ハナイグチ）は？

栽培が可能になったヤマブシタケ

山と博物館第42巻第9号
一九九七年九月二十五日発行
発行　〒388長野県大町市大字大町八〇五六―一
大町山岳博物館
TEL〇二六一―二二―〇二一一
印刷　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―二三九三